

令和4年度中学校武道授業（少林寺拳法）指導法研究事業



令和4年度中学校武道授業（少林寺拳法）指導法研究事業〔主催＝日本武道館・少林寺拳法連盟・日本武道協議会、後援＝スポーツ庁〕が6月25日から26日までの2日間、少林寺拳法東京研修センター（東京都豊島区）において、研究者5名、研究協力者3名、連盟事務局3名が出席して実施された。

本研究事業は中学校武道必修化の充実に向け、新学習指導要領に準拠し、年間8～10時間の授業時間想定で、各武道種目の特性を踏まえた指導計画、指導内容、指導法、評価等について、教育効果の上がる武道授業（少林寺拳法）指導法の研究会をするものである。

■1日目（6月25日）

開講式では、はじめに主催者を代表して和田健^{わだ たけし}日本武道館振興課長が挨拶を述べた。続いて研究者を代表して高坂正治^{こうさか まさはる}国際武道大学体育学部武道学科教授が、「2日間、固定観念をなくし、何ごとにも疑問を持って主体的に取り組んでいただきたい」と挨拶を述べた。

開講式終了後は、3名の研究協力者による授業実践報告が行われた。

はじめに妹尾康代^{せのおやすよ}協力者から、少林寺拳法を授業で選択する利点や指導上の課題などについて報告があった。

次に中村優一^{なかむら ゆういち}協力者から、6時間の単元計画で最も力を入れたのはオリエンテーションで、その中でも学習目的や身体操作の体験などに時間を割いた。また、ペーパーテストや技能テスト、学習カードやグループ活動、授業への参加状況などを評価基準の判断材料としたと報告があった。

続いて桑島亜紀^{くわじま あき}協力者から、自身が勤務する豊^{ろう}学校で少林寺拳法を採用する理由として、体の状態は違っても指導方法を工夫することで一緒に行うことができる

ので有効ではないかと報告があった。課題として、生徒が受け身になりがちなので、主体的対話的学びの質の改善が挙げられた。

午後の実践研究では、はじめに中島正樹^{なかじま まさき}研究者が授業の考察、教科横断の考察、技の特性の考察について検討した。

授業の考察について、声かけの際に留意すべき点を出席者に求めたところ、小井寿史^{おい ひさし}研究者から、声かけは子どもたちが興味や関心のある言葉から繋げていき、着眼点を持って取り組むことが大切であると発言があった。

教科横断の考察では、安田智幸^{やすだ ちゆき}研究者から、目標と手段の共有をどこまでできれば良しとするのかといった疑問が投げかけられ、内受突の技を例に検討した。

技の特技の考察では、自分を守り相手を制する「護身練胆」、技を身につける「精神修養」、体の使い方を知る「健康増進」の三徳を使った指導案を今後取り入れていきたいと中島研究者がまとめた。

次に小井研究者が発表を行い、今後はICTの活用により、子どもが自ら調べ、活用し、考え、対話の中で資料を作るような武道授業に進化させる必要があるのではないか。またオンライン授業の導入により指導者不足の解消に繋がるのではないかと提案があった。

続いて、上杉嘉紀^{うえすぎ よしき}研究者から、生徒に楽しく、効率よく、正確に少林寺拳法の技術を習得させるための手段として、言語化集を用いて、開足中段構えの技を取り上げて検討した。

最後に高坂研究者から、本年6月に行った笠岡市立笠岡西中学校の授業実践アンケートの調査結果について報告があった。

■2日目（6月26日）

9月の全国研修会に向けて検討が行われた。3日間参加しても繋がりがイメージできないという声もあるので、単元計画を作成するところまで発展させた内容にしたいといった意見や、保体教員で少林寺拳法を専門としない参加者を中心に教材作成を行うべきではないかといった意見が出された。

最後に、少林寺拳法連盟が令和4年度に作成を予定している指導書の内容について検討が行われた。

閉講式では中島研究者が講評を行い、全日程を終了した。